

倭建命誕生

守屋俊彦

一

倭建命の一生は征討の生涯であった。彼は父の景行天皇の命により、まず、西征に従事し、息つく間もなく、東国の征討に向かっている。日本書紀によれば、彼が能褒野で亡くなった時、「時に年三十にましましき。」（景行紀四十年）と、三十才であったという。短かい人生である。その短かい人生は、征討につぐ征討であった。人と戦うばかりでなく、神とも戦ったのである。

その間、平安な一時といえば、美夜受比売と結婚した時ぐらいであった。彼は東国征討の帰途、尾張に立ち寄り、彼女と結婚している。古事記によれば、この時二人は、

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る鶴 弱細 手弱腕を 枕かむとは 我はずれど さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり（二七）

高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの 年が来経れば あらたまの 月は来経往く 諾な諾な諾な 君待ち難に 我が著せる 襲の裾に 月立たなむよ（二八）

と、愛の歌を交わしている。女性の生理を歌い込み、不満と言訳を述べながら、愛を高め確かめている。そして、結

婚をした。日本書紀では、「淹留りて月を躑えたまふ。」(景行紀四十年)と、一ヶ月以上も彼女の家に滞在したことになっている。彼の人生の中で、たった一度の休息と甘美の時であったともいえよう。

ところで、その美夜受比売は尾張国造の祖であった。一方、倭建命は天皇の代理者であった。古代では、こうした天皇やその代理者と、地方の豪族の女との結婚は、単なる結婚ではなく、実は、服従儀礼の一つだったのである。豪族の女は、氏族の神に仕える巫女であり、その神の体現者でもあった。だから、そうした女と結婚することは、氏族の神を征圧したり、その神を吸収することになり、従って、古代ではそれが実質的に相手を服従せしめることになる、という論理なのであろう。

すれば、美夜受比売との結婚も、尾張氏の服従儀礼だったということになる。結婚はまさしく征討の一つの仕事だったのである。そこには、責任と緊張があり、休息や甘美はなかったのである。だから、倭建命の一生は、総て征討で埋まっていることになる。征討こそ彼の人生の象徴といえるのである。

二

その征討は西征と東征との二つに分かれるが、西征の要になっているのは熊曾征討である。古事記には、

ここに小碓命、其の姨倭比売命の御衣御裳を給はり、剣を御懐に納めて幸行でましき。故、熊曾建の家に到りて見たまへば、その家の辺に軍三重に囲み、室を作りて居りき。ここに御室築せむと言ひ動みて、食物を設け備へき。故、その傍を遊び行きて、その楽の日を待ちたまひき。ここに其の楽の日に臨りて、童女の髪その結はせる御髪を梳り垂れ、その姨の御衣御服を服して、既に童女の姿になりて、女人の中に交り立ちて、その室の内に入りましき。ここに熊曾建兄弟二人、その嬢子を見感でて、己が中に坐せて盛りに楽げしつ。故、その酣なる時に臨りて、懐より剣を出し、熊曾の衣の衿を取りて、剣もちてその胸より刺し通したまひし時、其の弟建、見畏みて逃げ出で

き。すなはち追ひて其の室の椅の本に至りて、その背皮を取りて、劍を尻より刺し通したまひき。ここにその熊曾建白言しつらく、「その刀をな動かしたまひそ。僕白言すことあり。」とまをしき。ここに暫し許して押し伏せたまひき。ここに「汝命は誰ぞ。」と白言しき。ここに詔りたまひつらく、「吾は纏向の日代宮に坐しまして、大八島国知らしめす、大帯日子淤斯呂和気天皇の御子、名は倭男具那王ぞ。おれ熊曾建二人、伏はず礼無しと聞こしめして、おれを取殺れと詔りたまひて遣はせり。」とのりたまひき。ここにその熊曾建白しつらく「信に然ならむ。西の方に吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大倭国に、吾二人に益りて建き男は坐しけり。ここをもちて吾御名を献らむ。今より以後は倭建御子と称ふべし。」とまをしき。この事白し訖へつれば、すなはち熟菰の如振り折ちて殺したまひき。故、その時より御名を称へて、倭建命と謂ふ。

とある。ここには、英雄としての倭建命の力量が遺憾なく發揮されている。相手を欺す謀略や打倒して止まない意志などが、女装や熟れた瓜の比喩などを通して見事に描かれている。古事記の中では白眉の戦闘場面といえよう。

だが、ここで注意してみたいのは、この物語の終りが、「故、その時より御名を称へて、倭建命と謂ふ。」という句で結ばれていることである。これで見ると、この物語は、倭建命の名の由来譚の形態になっているとみられるのである。このことは従来あまり注意されていなかったもので、ここではその点を問題として取り上げてみることにしたい。

一体、この物語が熊曾建の征討の事実のみを語るといふのであれば、「その背皮を取りて、劍を尻より刺し通したまひき。」とか、「すなはち熟菰の如振り折ちて殺したまひき。」という句で終っていけばよいのである。それで十分なのである。ところが、この物語では、その間に、

吾は纏向の日代宮に坐しまして、大八島国知らしめす、大帯日子淤斯呂和気天皇の御子、名は倭男具那王ぞ。という倭建命の名乗りと、

然るに大倭国に、吾二人に益りて建き男は坐しけり。ここをもちて吾御名を献らむ。今より後は、倭建御子と称ふ

べし。

という熊曾建の名献上の会話が入っているのである。これでは、あの二つの句に込められた、打倒への強い意志や凄まじいばかりの迫力は薄れてしまうのである。しかし、このような倭建命の名についての会話が入って居り、「故、その時より御名を称へて、倭建命と謂ふ。」という句で結ばれているところに、実は、この物語の原話が素顔をみせているのである。

記紀には、このように名の由来を語ったものが幾つかある。古事記（上巻）の海幸山幸の神話の条の、豊玉毘売が出産をする場面に、

ここに海神の女、豊玉毘売命、自ら参出て白ししく、「妄は己に妊身めるを、今産む時に臨りぬ。こを念ふに、天つ神の御子は海原に産むべからず。故、参出到つ。」とまをしき。ここにすなはちその海辺の波限に、鶺鴒の羽を葺草にして、産殿を造りき。ここにその産殿、未だ葺き合へぬに、御腹の急しさに忍びず。故、産殿に入りましき。とあり、その一番終りに、「ここをもちてその産みましし御子を名づけて、天津日高日子波限建鶺鴒葺草葺不合命と謂ふ。」という句がある。火遠理命と豊玉毘売との間に生まれた子が、なぜ天津日高日子波限建鶺鴒葺草葺不合命といふのか、ということについて説明したものである。

また、日本書紀の反正天皇の条に、

瑞鹵別の天皇は、去来穂別の天皇の同母弟にまします。去来穂別の天皇の二年に、立ちて皇太子となりたまひき。天皇初淡路の宮に生れたまひき。生れながらにして鹵は一つの骨の如く、容姿美麗しかりき。ここに井ありて瑞の井と曰ふ。汲みて太子に洗しまつりし時に、多遅の花、井の中にありき。因りて太子の名と為しき。多遅の花は今
の虎杖の花なり。

とあり、すぐ続けて、「故、称へて、多遅比の瑞鹵別の天皇と謂す。」と記してある。反正天皇の名を多遅比の瑞鹵別

の天皇と称えることについて語ったものである。¹⁾

一体、古代の人々の思惟では、人の名はその名で表わされた人そのものであった。単なる記号ではなかったのである。名は実体だったのである。すれば、名はその人にとっては、きわめて大切なものであったとみななければならぬのである。時には秘すべきものでもあったのである。だから、神の名や天皇の名ということになれば、重要な意味を持つものになってくるのである。そこから、神や天皇の名の由来を説明する神話や物語が作られてくるのである。記紀が語るように、神話や物語があつて、そこから名がでてきたのではなく、まず名があつて、そこから神話や物語が引きだされてきたのである。記紀の記述とは順序が逆なのである。

それはともかくとして、このようにみえてくると、この物語にしても、少くともあの会話の部分は、倭建命の名の由来を語るものとして、その名から作られたものとみられるのである。

三

ただ、天津日高日子波限建鷦鷯草葺不合命や多遲比の瑞鹵別の天皇の場合と比べてみると少し異なるところがある。その命名者がはっきりしていることである。熊曾建なのである。このように命名者がはっきりしているものとしては、日本書紀の仁徳天皇元年の条に、

初、天皇の生れましし日、木菟産殿に入りき。明くる旦、誉田の天皇、大臣武内の宿禰を喚して、語りたまはく、「こは何の瑞ならむ」とのりたまひき。大臣対へ言さく、「吉き祥なり。また昨日臣が妻の産める時に当り、鷦鷯産屋に入れり。こもまた異し」とまをしき。ここに天皇、のりたまはく、「朕が子と大臣の子と、同じ日に共に産れたり。並に瑞あり。こは天つ表なり。以為ふにその鳥の名を取り、各相易へて子に名けて後の葉の契とせむ」とのりたまひて鷦鷯の名を取りて太子に名けて大鷦鷯の皇子と曰し、木菟の名を取りて大臣の子に名けて木菟の宿禰

と曰ひき。こは平群の臣の始祖なり。

というのがある。命名者は誉田の天皇（応神天皇）である。そして、大鷦鷯の皇子と木菟の宿禰の二人の名の由来が語られている。二人の名の由来が同時に語られるというような複雑な形になっているのは、そこで名易えの儀礼が行われたからである。これについては、「以為ふにその鳥の名を取り、各相易へて子に名けて後の葉の契とせむ」とあるが、やや曖昧な点がみられる。これで見ると、木菟と鷦鷯という二つの鳥の名を交換して、それぞれの子に名を付けたというようにとれる。しかし、そこには幾らかの変容があるのであって、もともとは誉田の天皇の子に「木菟」を付け、武内の宿禰の子に「鷦鷯」を付け、こうして一旦それぞれの子に鳥の名を付けた上で、その名を交換したということだったのではないだろうか。

この物語の原話をどのように考えてみたいのは、実は、古事記の仲哀天皇の条に、例の有名な品陀和氣命と伊奢沙和氣大神との名易えの物語があるからである。ここでは神と人がその名を交換しているのである。

故、武内宿禰命、その太子を率て、禊せむとして、淡海また若狭国を経歴し時、高志の前の角鹿に飯宮を造りて坐さしめき。ここに其地に坐す伊奢沙和氣大神の命、夜の夢に見えて云りたまひしく、「吾が名を御子の御名に易へまく欲し。」とのりたまひき。ここに言禱きて白ししく、「恐し、命の随に易へ奉らむ。」とまをせば、またその神詔りたまひしく、「明日の旦、浜に幸でますべし。名を易へし幣献らむ。」とのりたまひき。故、その旦に浜に幸行でましし時、鼻毀りし入鹿魚、既に一浦に依れり。ここに御子、神に白さしめて云りたまひしく、「我に御食の魚給へり。」とのりたまひき。故、またその御名を称へて、御食津大神と号けき。故、今に氣比大神と謂ふ。また、その入鹿魚の鼻鼻かりき。故、その浦を号けて血浦と謂ひき。今は都奴賀と謂ふ。

ここには、名易えの儀礼が語られているのだが、その実質が明らかでない。つまり、大神の「吾が名を御子の御名に易へまく欲し。」ということばについて幾通りかの解釈が可能だからである。もっとも一般的なのは、大神が自分の

名をあげて太子の名としたという説である。しかし、この逆に大神が太子の名を貰って自分の名とした、というようにも解することができるのである。この二説は何れもどちらか一方が相手の名を貰って名を易えるということになるのだが、名を易えたのは一方だけではなく、双方なのだ、ととっても差し支えないのである。相互交換なのである。この三説は何れとも決しがたいのだが、「易」には相互に交換するという意があり、前にあげた仁徳紀の例からしても、ここは相互に交換した意にとるのが穏当なところではないだろうか。

現に、応神即位前紀に、誉田の天皇の名に關して、一書の説として、

初、天皇、太子たりし時、越の国に行でまし、角鹿の筥飯の大神を拝祭たまひき。時に大神と太子と名を相易へたまひき。故、大神に号けて去来紗別の神と曰し、太子に誉田別の尊と名けまつりきといへり。然ありせば大神の本の名は誉田別の神にして、太子の元の名は去来紗別の尊なりと謂ひつべし。然はあれども見ゆる所無し。いまだ詳ならず。

とある。これで見ると、太子と大神とは名を相互に交換する意になっている。既に日本書紀編集の時点でのこのようにも受け取られているのだから、そのことを尊重してみれば、相互交換の意に取るのが原義に近いのではないだろうか。このようにとると、この一書に述べているように、太子の元の名は「伊奢沙和氣」であり、大神の元の名は「品陀和氣」であり、それを交換して、太子が品陀和氣大神になり、大神が伊奢沙和氣大神になったということになるのである。

名易えの儀礼をこのようにとることは、いささか込み入っていて奇妙な感じがしないでもないが、そこに古代特有の思惟があるのであって、後に述べるように、名易えが服従の儀礼であり、それが天皇の誕生にかかわってくるのである。なお、この物語には、禊や魚の献上のことなどがあって複雑な内容になっているが、このことも、天皇の誕生や服従の儀礼にかかわることになるので、後に一緒に述べることにしたい。

四

そこで、この仁徳紀と仲哀記の名易えの例からみると、熊曾建の場合も、このように一方的に名を献上して名を易えるというのではなく、倭建命と熊曾建が名を相互に交換するというのが、その原形だったのでないだろうか。この物語の下には、名易えの儀礼が、型としてあったような気がするのである。

ところで、ここは熊曾建が倭建命に服従する場面である。歴史的にいえば、熊曾という氏族が大和朝廷に服従することなのである。その服従ということの重さからすると、「吾一人に益りて建き男」だから、「倭建御子と称ふべし」と、名を献上して祝福するだけというのでは軽いのである。そこに敗者の勝者にたいする苦い感情が入っているにしても、何処か物足りないのである。

そこで、名易えの儀礼を服従という現実絡ませ、少し厳しくして、このことを考えてみたい。単に名易えというのであれば、倭建命は熊曾建という名を貰い、熊曾建は倭建命という名を貰ったことになる。だが、そこに服従という現実を絡ませてみれば、倭建命は熊曾建という名を奪い取り、熊曾建は倭建命という名を押し付けられた、というようにとってみたら如何であるうか。

前にも述べたように、古代の人々の思惟では、名はその名で表わされた人そのものであった。すれば、熊曾建という名は、単なる名ではなく、熊曾建そのものということになる。だから、熊曾建という名を取り上げれば、熊曾建という人間の实体は空っぽになってしまうのである。そこで、実質的には服従することになるのである。そこには、氏族の神や神話を取り上げたのと同じような意図があったとみるべきであろう。

あの仲哀記の物語をみると、伊奢沙別気大神は名易えの後、「名を易えし幣献らむ。」といって、その贈り物として入鹿魚を献っている。この大神はこの地の豪族である角鹿氏の祭る神なのである。その角鹿氏は海人族であった。

だから、大神が入鹿魚を献上した背景には、海人族としての角鹿氏の服従という厳しい現実があるものとみななければならぬのである。その贈り物を献ることが、名易えと一連なものとして語られているということは、名易えの儀礼に服従の役割があったことを示しているといえよう。

それならば、倭建命がその名を熊曾建に押し付けたということはどういふことになるのであろうか。これについては、青木紀元氏が、仲哀記の名易えについて、大神が太子の名を賜ったのだとして、

それは、今までの角鹿の独立勢力としての名を棄てて、中央の大和政権から新しく名を頂くといふことになる。それは取りも直さず、角鹿の大和に対する服従の表明を意味するものではないか。^③

と述べていられるのがこの際参考になる。すれば、熊曾建が倭建命という名を貰うことは服従の表明といふことになる。ただ、それに今少し古代的な意味を加味して述べてみれば、倭建命という名は倭建命そのものだから、それを押し付けて置けば、倭建命は常に熊曾建の側にいることになり、従って、彼を圧迫し、その行動を監視することができるのである。そこで、服従させるということになるのである。

名易えということをとってみれば、それは服従という重さに似つかわしいものになる。だから、今みるように、熊曾建が一方的に名を献るといふのでは、服従の意味は半減するのである。変容であらう。

さて、天皇が豪族たちを次ぎ次ぎに服従させ、古代国家を形成して行ったことはいうまでもないことである。その際、軍事的、政治的な服従ばかりでなく、こうした儀礼が行われていたのではないだろうか。そして、そうした服従ということが現実には無くなった時代でも、天皇になる時、こうした儀礼が儀式として行われていたのではないだろうか。天皇になるための条件である。天皇は即位に当って、豪族たちを集め、名を差し出させ、自らの名を与えるのである。かつて現実に行われたことの繰返しであり、再現である。豪族たちを服従させる時、その女と結婚したこと
の再現として、采女を差し出させ、共寝をしていたのと同じことである。

倭建命は、ここで小碓命から倭建命になっている。いわば、倭建命の誕生である。その倭建命は天皇の一番の原像だったのである。倭比売命と一体となって政治を行い君臨したのである。古代国家の原風景である。すれば、倭建命の誕生は天皇誕生といってもよいのである。だから、ここで名易えの儀礼が行われるのである。それは天皇になるための必要な条件だったからである。この物語のずっと奥深いところに、天皇誕生のための、名易えの儀礼があるので、はなかるうかと推測してみたいのである。

三品彰英博士は、あの仲哀記の物語について、トコヨから喪船で渡って来た皇子がミソギをしてこの世に再生し、イザサワケノ大神の社前で神の名を自分の名としたということは、もっとも典型的な成人式の儀礼であり、カリスマの社会における「名取り」である。あるいは原始的な即位儀礼と解釈してもよい。

というようなことを述べていられる。私の場合とは証明の過程が異なっているが、ここに即位儀礼を認めるのならば、この物語に天皇誕生の儀礼を認めることも或いは可能なのではないだろうか。

五

そこで、このことを今少し異なった角度からみてみたい。その一つは征討の相手が、ほかならぬ、熊曾建だったということである。熊曾建とは熊曾の勇者の意である。熊曾の王者である。しかし、そこに動物としての熊のイメージが重なっていることも否定できないであろう。強い王者と強い熊とが一つになって作られた名であろう。

それにしても、倭建命が征討に当って、最初に出会った相手が、熊を思わせる熊曾建であったことは興味深いものがある。それは、神武天皇が大和平定に当って、熊野村で熊に会われたとあるのを想起させるのである。

故、神倭伊波礼毘古命、其地より廻り幸でまして、熊野村に到りましし時、大熊髪かに出で入りてすなはち失せき。

ここに神倭伊波礼毘古命、倏忽に惑えまし、また御軍も皆惑えて伏しき。この時、熊野の高倉下、一ふりの横刀を賣ちて、天つ神の御子の伏したまへる地に到りて献りし時、天つ神の御子、すなはち寤め起きて、「長く寝るかも。」と詔りたまひき。故、その横刀を受け取り給ひし時、その熊野の山の荒ぶる神、自ら皆切り仆さえき。ここにその惑え伏せる御軍、悉に寤め起きき。(古事記)

神武天皇が熊野村で熊に会ったのは、倭建命が熊曾国で熊を思わせる熊曾建に会ったというのと、型としては似ているのである。

だが、肝心な熊の実体ははっきりしない。三品博士は、この熊は水神であり、天皇家の祖神であろうとされている⁽⁵⁾。この時、高倉下が横刀を献上し、それによって、熊野の山の神を切り倒している。そして、この横刀は天照大神の命令によって降されたものであった。この横刀と熊は恐らくは同一のものであり、そこにこの熊が天皇家の祖神であったことをみることができるのである。

ところで、この熊に会う前後の神武天皇の行動をみると、その前では、日下の戦いに敗れ、男の水門で兄の五瀬命を失うなど苦戦しているが、この後は、吉野、宇陀、磯城などで連戦連勝し、遂には橿原で即位している。熊に会ったのが戦局転換の契機になっている。そして、つまりは、即位している。熊に会うことが、即位への踏台になっているのである。そこで、熊と即位とを結び付けてみると、この熊は或いは天皇霊というようなものではなかったかという気がする。天皇霊の象徴である。天皇をして天皇たらしめるものである。それを授受することが、天皇になるための必要な条件であった。この時、神武天皇は、「惑え」たとある。仮死状態をいうのであるが、儀礼的な死の中で天皇霊を獲得し、天皇として再生する儀礼が、この物語の背後にあるのではないだろうか。天皇誕生の儀礼である。

すれば、倭建命が熊曾建に会ったというのも、型が似ているところからすると、そのずっと奥深いところに、天皇

誕生の儀礼があるように思われるのである。ここで天皇誕生のための名易えの儀礼が行われているとすれば、このように考えてみることも或いは可能なのではないだろうか。つまり、ここには、天皇誕生の儀礼が重複しているということになるのである。

なお、この物語には、今一つ天皇誕生の儀礼が投影しているようである。倭建命は熊曾征討への出発に当って、倭比売命から着物を貰っている。これで後に女装をしているのだから、一見彼女の普段着のようにみえる。しかし、彼女が天照大神に仕える高級巫女であつてみれば、この着物にはもっと異なった性格があるものとみた方がよい。神衣である。天照大神が着ている着物である。その神の着物は、神の名と同じように、神そのものであつた。つまり、この着物は天照大神そのものであつたということになるのである。

そこで、倭建命がこの着物を貰つて征討に出発したということは、天照大神の加護を得ようとしたのだ、というように解することができるのである。その他一、二、の解釈もあるが、何れにしても、従来はこの着物を征討に結び付けたものであつた。しかし、焦点を少し動かして、貰うという行為そのものに移してみたら如何であろうか。神衣が天照大神であるとすれば、それを貰うということは、天照大神、つまり、天皇霊を得るということになる。すれば、ここにも、天皇誕生の儀礼があるとみられるのである。

仁徳記をみると、天皇は、求婚した女鳥王にたいして、彼女が着物を織っていたところから、この着物に託して、女鳥の我が王の織ろす機誰が料ろかも(六六)と問われたのにたいして、彼女は、

高行くや 速総別の 御製料(六七)

と答え、その後、「速総別 鷓鴣取らさね」(六八)と速総別王に反逆を促している。私は以前に、この問答歌の下に、神衣を得ることが天皇の地位を得ることになる、という古代の天皇誕生の儀礼を推測してみたことがある。もし、

そうだとすれば、ここにも、天皇誕生の儀礼が投影しているとみることでもできるのではないだろうか。

このようにみてくると、この熊曾征討の物語の下には、始めから終りまで、天皇誕生の儀礼が幅広く横たわっていることになる。ここで、倭建命は小碓命から倭建命になっている。倭建命の誕生である。それは同時に天皇誕生でもあった。ということは、倭建命は天皇への階段を昇りつつあったということになる。そこで、そのことのまわりに、幾つかの天皇誕生の儀礼を置き、それを征討という現実の中に溶かして、この物語が作られたということになるだろう。これがこの物語の原話なのである。

だが、倭建命は天皇になることはできなかった。彼は一度その地位に昇りかけながら、何等かの事情によって、またそこから降りて行ったのである。神との戦いに敗れ、遂には破滅して行った東征の物語には、このことが投影しているのではないだろうか。⁽⁸⁾

倭建命の一生は征討の連続であった。征討こそ、彼の人生の象徴であった。彼の物語が征討によって埋まっているのは、彼が天皇の地位に昇ったり降りたり、天皇の周辺をぐるぐると廻ったということが、征討という現実の中に溶けこんで作られているからである。

古事記をみると、倭建命の名について幾らか混乱がみられるようである。景行天皇の系譜のはじめには、

この天皇、吉備臣等の祖、若建吉備津日子の女、名は針間の伊那毘能大郎女を娶して、生みませる御子、櫛角別王。

次に大碓命、次に小碓命、亦の名は倭男具那命。

とあって、小碓命、倭男具那命になっているが、その後では、

凡そのの大帯日子天皇の御子等、録せるは廿一王、入れ記さざるは五十九王、并せて八十王の中に、若帯日子命と倭建命、また五百木の入日子命と、この三王は太子の名を負ひたまひ、それより余の七十七王は、悉に国国の国造、また和氣、また稻置、具主に別けたまひき。

と、倭建命になり、また、最後には、

小碓命は、東西の荒ぶる神、また伏はぬ人等を平けたまひき。

と、小碓命になっている。彼の身辺に、天皇の地位をめぐって、波瀾があったことを示しているのではないだろうか。⁹⁾

注

(1) 垂仁記に、天皇と沙本毘売との間に生まれた子の名について、沙本毘売が、「今、火の稲城を焼く時に当たりて、火中に生れましつ。故、その御名は本牟智和気の御子と称すべし。」と答えたところ、名の由来について語ったものであろう。ただし、垂仁記には、稲城が焼けたという話はない。何等かの理由によって脱落したのであろう。

(2) 西宮一氏は集成本に、「自分の名を襲名させること。」(一五九頁)と注していられる。卓説である。ただ、その後の説明がない。襲名させるというのであれば、倭建命が熊曾建になるということになるのではないだろうか。

(3) 青木紀元氏 角鹿・氣比〔福井大学 国語国文学〕第二十一号 七頁

(4) 三品彰英論文集 第四卷 増補日鮮神話伝説の研究 一二二頁

(5) 三品彰英論文集 第二卷 建国神話の諸問題 四五八頁

(6) 日本書紀では、熊曾建ではなく、川上梟師になっている。八岐大蛇が肥の河の上流にいたように、天皇霊の象徴である熊が川上の山深いところにいるところから付けられた名かも知れない。

(7) 拙著 古事記研究——古代伝承と歌謡—— 二四八頁

(8) 東征では、倭建命は神々との戦いに苦しみ、遂に敗れ去っている。西征とは対照的である。天皇霊を得ようとして得られなかったことが、征討という現実の中に溶けこんでいるのであろうか。これについては別に考えてみたい。

(9) 倭建命がかつて天皇として扱われながら、後に天皇の地位からはずされ、皇子になって行く過程については、吉井巖氏に、皇統系譜の作成を通しての詳細な論がある(「天皇の系譜と神話 二」「ヤマトタケル」)。